

《第 476 回（2020 年 11 月 12 日） 子どもの本の読書会記録》 参加者：7 人 文書参加：2 人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『星の王子さま』 サン=テグジュペリ/作、内藤 濯/訳 岩波書店

『星の王子さま 新訳』 倉橋 由美子/訳 宝島社

今月は、『星の王子さま』を、二人の訳で読み比べてみようという試みです。この本は、フランスの作家サン=テグジュペリが、ナチスによる弾圧の渦中にいるユダヤ人の親友に宛てて書いた物語で、初版はアメリカで 1943 年に出版されました。

物語は、飛行士の「ぼく」が不時着した砂漠の真ん中で、小さな男の子と出会うところから始まります。その男の子は「やっと家くらいの大きさ」の星からやってきた王子さまで、ふるさとのことや、これまで巡ってきた星々のことを「ぼく」に教えてくれます。しかし最後には、二人の別れがやってきて……。

あまりにも有名な作品ですが、読み手によって、受け取り方や感じ方が異なるであろうこの物語。さっそく、読書会に参加された方々の感想を紹介します。

●ずっと内藤訳で読んでいたので、他の訳が受け入れがたかったが、倉橋訳は丁寧で良いなと思った。訳者ごとに、全く違う本になる。読み返すその時々で、立ち止まる箇所が違う。いつ手に取るかによって、好き嫌いや感じ方が変わるだろうな。切なさ、はかなさをしみじみと感じさせられる。人に勧めようとは思わない。その時が来たら、手に取るべき本なのかな。

●20 歳の頃、別世界に入るように読んだが、この読書会が無いともう一度読むことは無かっただろう。内藤訳、倉橋訳に加えて、池澤夏樹訳のあわせて 3 冊を読んだので、分かりにくかった重要な場面を理解することができた。感情を表すのにこんな言葉があったのかと気付かされた。自分の中の大事な物語にしていこうと思った。読んだら、心が刷新されたように、新鮮を感じる。

●何回読んでもとらえどころがなく、苦手な本だった。倉橋訳は、今風の言葉を使っていて、すんなり入り込むことができた。訳者の捉え方や表現の仕方と、読者との間に、お互いの想像力があってこそその作品。こども時代に読んだ時とはイメージが異なり、ラストはこんな感じだったっけ?! と衝撃を受けた。王子さまが、悩みや迷いを、消化できたということなのかな。

●中学校にも高校にもあった本。内藤訳で読んでいたので、他の訳者のものと読み比べると違和感があった。訳者の中でイメージがあって、自分の読み方で訳している。内藤訳が一番幅が広く色んな捉え方ができると思った。キツネやバラとの会話が印象に残っている。しょうもない大人たちが出てくるシーンも割と好き。今まで吟味しながら読むことが無かったので、今回はいつもと違う読み方ができた。

●若い頃、都会に出た時に読んで、すごく良い本だなと思った。今回読んで懐かしかった。「家くらいの大きさの星」というのもすんなり想像することができる。倉橋訳も素敵で良いが、内藤訳には漂うものがある。キツネと王子さまとの出会いのように、人も出会いによって大切なものを見つけていく。大人が読んでも深いメッセージを感じた。感性が大事ということを再確認できた。

●ずっと読みたいと思っていた。翻訳された時代が新しいからか、新訳の方が読みやすい。様々な大人の傲慢さが、純粋な王子さまを通して描かれている場面では、耳が痛くなるところが何度もあった。こどもの頃に読んでいたら、王子さまに共感できたのかな。数十年後に読んでみたら、また違った印象を受けるかも。可愛らしい挿絵だが、ところどころドキッとさせられるようなものも。特に、バオバブの絵。

●50 年ぶりに読んだが、当時は嫌いな本だった。ある程度成長してから読むべきだった。こどもの頃の自分は、王子さまが、遠い星に帰るために蛇にかまれて死んだと読んでモヤモヤしたのだろう。今の自分もやっぱり苦手だった。切なくてモヤモヤする。それぞれの訳の『星の王子さま』と、解説を読むことで、訳者と作者に触れることができたと感じる。自分なりの読み方はできたのかなと。

次回 12 月 10 日（木）10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室

テーマ「わたしのベストブック」

☞ 児童書の中から、ご自身の一番好きな本を 1 冊選んで持ってきてください。

☞ 当日は、時間の許す限り、その本の魅力を語ってください!